

末黒野

すぐろの



2月号

(通巻882号)

初時雨

黒滝志麻子
(主宰)

宿場あと当り年なる柿の照り
柿落葉掃かず赤きを惜しみけり
海にまで裾ひく山や蜜柑畑
突堤の尖りをかくし冬の霧
神の留守乱れ飛びたる鳶の笛
すぐと言ふ駅の遠しや初時雨
神木の洞を抜けきぬ冴ゆる風
曇天や裸木好む鳥数羽
山茶花の白きを濁し昼の雨
晴れ晴れとさざなみ引けり尾長鴨
塀越しの連蟬の音や落葉道
畦の間を抜けきて淡き雪の原

風の声

森清堯
(副主宰)

鈴懸の幹の白き斑秋日濃し
朝の日の微塵を乗せて芋の露
穂薄や富士を離るる吊し雲
谷戸奥の雀色時雁来紅
うづ高き藁の影濃し秋没日
小鳥来る朝をにぎはふ楠大樹
地の酒の一合枰や氷頭脛
石叩夕日の残る石畳
岩すべる水の白さや冬紅葉
がらんだうの空の点晴木守柿
枯蓮や嗄れのからまる風の声
真つ赤なる魚屋の両手鰯捌き

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

一位の実

岡野里子

荒川や秋風滑る岩畳
濁流や雨に冷えたる岩畳
長瀨の奇岩昼や薄紅葉
鐘の音の一番札所一位の実
雨空の山間を霧兜太句碑
神域の秋冷の底杉木立
曲がるたび澄める秋気や九十九折
芒野の光りの波や銀の波
そぞろ寒浮棧橋の軋む音
碑の錆色著るし暮の秋

甲斐の旅

菅野日出子

柔道着干して待たるる秋日差
小流れにもどる魚影や台風過
廃屋の大樹に炎えて烏瓜
昇仙峡へヘアピンカーブ初もみぢ
稜線にとがる杉の秀渡り烏
溪谷の岩囃む流れ薄紅葉
畳なはる甲斐駒はるか秋夕焼
水引の紅を映せり宿の池
松手入終へぬ古刹の四脚門
山門を凌ぐ松が枝雁渡る



波郷忌

田中臥石

帰郷する友と別盃おでん鍋
吟行の夢見るやうに草紅葉
朝寒や起きてぎくりと打身膝
診断の腎は健やか冬に入る
うかと来て忌中の札や冬薔薇
波郷忌を迎へ霜月粥を炊く
閑伽桶の水澄む波郷忌なりけり
杯を捧ぐや波郷忌の夕べ
山茶花の空やふるさと風の涯
上京の江戸川を越ゆ冬落暉

草紅葉

森清信子

湿原をつなぐ木の橋赤とんぼ
かすかなる光を宿し草紅葉
一途なる真砂女のつもり裂脛
蟹が家の軒の雨垂れ鶏頭花
木犀や幹に触るれば遠のく香
新酒汲む夫との会話少なくも
ていねいに淹るる珈琲菊日和
琥珀色に暮るる一村秋灯
仮名文字の墨磨るゆとり秋の声
日溜りの母の両膝石露の花

十三夜

安齋久英

鈍色の安房の稜線暮の秋
うるみけり雲の追ひゆく十三夜
雨脚のいさぎよく去り十三夜
流れゆく川面てらてら秋深し
鱗雲尾をふんはりと離ちけり
草もみぢ踏むをためらふ畔つづき
冬に入るわけても深き海の紺
立冬や起重機の腕斜に構へ
木枯や大型船の出航す
みちのくに雪降る報を聞く夜更け

秋日和

石黒興平

形違ふ稻架に風土のありにけり
長男は屋号を呼ばれ里祭
馬の目の潤みて花野映しをり
勝鬨に沸く騎馬戦や秋日和
塀越しの笑ひかけたる石榴かな
雁や波郷師逝きて半世紀
糲殻の煙に追はれ夕鴉
秋晴や改札を出る弓の丈
石粗き枯山水や秋の声
ふる里に似たる谷戸径秋惜しむ

乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



草紅葉

及川照子

銀漢やいとしき人のみな遠く
俳縁てふ和みの旅の夜長かな
落暉いま山塊染めて草紅葉
忘却の脳内手帳枯れすすき
靴の音の朽ち葉に沈む山路かな
潮の香と日だまりの中石路の花
古写真考のマントに包まれて

秩父

今村千年

金木犀

大川暉美

爽やかや水かんばしき和紙の里
一揆ありし兜太の母郷薄紅葉
山宿や霧の下より汽車の音
暮れそむる武甲の山や鳥渡る
三重の塔を残して秋の暮
子供来てその子供来て栗おこは
草紅葉瑞穂の国の休耕田

縁側の猫の寝姿冬に入る
菩提寺の軋む裏木戸こぼれ萩
花芒挿して野の風家内にも
一水と山気を重ね紙漉かれ
薄墨の山霧深き秩父かな
澄む秋や流れに稚魚の群れの影
あかときの風の放埒金木犀

父の断簡 岡田史女

遣り過す秋の驟雨や解脱門
咲き満ちて十月桜あはあはと
季語の利く一句為すべし賜高音
山里の懐深し真葛原
読み返す父の断簡秋燈下
参道の一直線や冬に入る
塔頭の藁屋根冬日あたたかし

鬘 小田嶋野笛

取り敢へずの黒着て通夜や星流れ
尼寺の参道細し忍草
桔梗や修業の尼の紫紺の衣
長き夜の占ひの札うらがへす
巻舌の演歌や月の影深く
鬘のごと付箋貼る夜なべかな
水も風も音も透けゆく白秋忌

一位の実 加藤静江

堰音の清しき里や秋うらら
秋入日里曲に細き煙立ち
名刹の厚き萱屋根一位の実
竹林の荒れて傾き賜鋭声
酔芙蓉午後より糸雨のつづきをり
ぬか雨や穂の生き生きとむら薄
たそがれの海やきらりと鱧跳べり

小春 斉藤マキ子

存へて秋の名の付く蚊となりぬ
一村に一寺一校柿たわわ
校長の余技と思へぬ菊花壇
小春日や小枝の箸のおままごと
小春日やバリカン小気味よく走り
晴れやかに即位パレード小春空
氷張る岸辺もあらむ冬銀河

秋時雨 堺昌子

暁の光透きくる庭の秋
金色に萌ゆるや秋の白樺湖
サフランの花やリフトの下染めて
ビーナスライン上り下りの山紅葉
白樺の黄金に燃ゆる秋の空
捨てるもの惜しくも思ふ秋時雨
伯父植ゑし柿挽ぐ我と子と二人

初紅葉 高木邦雄

鮎落つる大河の空や闇深む
茶屋覆ふ楓紅葉や日の洩れて
さざ波の池塘に映ゆや草紅葉
タクト舞ふ野外ステージ文化の日
黄落や声明高き深大寺
太き字の兜太の句碑や初紅葉
夕さりの秋野に座せば人恋し



青炎集

黒滝志麻子選



藤沢 宮澤靖子

一円の切手十枚買つて秋

玉入れの号砲待つ間赤とんぼ

藻塩木のけふる夜業や佐渡の小屋

廃業の店は詰め所や秋祭

泥酔を下戸の演ずる村芝居

身に入むや酒の李白を読みをれば

川崎 滋野 暁

金木犀寺門の深き弾の痕

出発の合図は幼秋うらら

再生へ回収箱や豊の秋

稲架一基に網を被せて学習田

トッピングの輪切りの酢橘手打蕎麦

古井戸の蓋の上なる秋の草

平塚 尾崎千代一

復刻の銅鐸鳴らす文化の日

乱菊や庭に据ゑたる石仏

秋宵の語学教室地図広げ

時雨るるや狭間に煙る相模灘

野仏の彫りの浅さや村時雨

ちり鍋や釣果の魚の煮え具合

横浜 北郷和顔

白馬岳の山頂透かし秋の雲

安曇野や空の青きを秋茜

靴音を風にのこして尾瀬の秋

翅傷む蝶のしとねか秋桜

きりたんぼ囲む一夜の長談義

夕映えの白馬連山眠り初む

横浜 松浦哲夫

古書店の奥へと秋の日差しかな

歓声のウイニングラン駒の秋

行く秋や太平洋の大落暉

名画座の跡に佇み文化の日

見るからに旧家の構へ柿たわわ

天高し寮歌の山を仰ぎ見る

横浜 橋場美篤

洋館の青き葺や天高く

鬼瓦据うる石庭秋日濃く

秋の日の満つる神木触れもして

くつきりと秩父連山霧霽れて

墨絵めく秩父連山霧裊

紙漉女の手首しなやか水匂ふ

目黒 五十嵐貴子

秋うらら旅に二人の晴女

波柿の勿体無くも撓かな

長き夜やラジオの声の柔らかき

公園の句碑寂として冬に入る

樹々の枝の影地に著き冬初め

木の葉散る色も踏む音も十色なる

横浜 池谷鹿次

吟行や昼餉に啜る走り蕎麦

井戸一つ残る古刹や柿の秋

石仏の背丈越したる枯尾花

魚河岸に真紅あざやか金目鯛

山風と湖風出合ふ冬木立

冬耕や手拭ねざり鉢巻に

横浜 山口 登

採りたての薑の色ややの肌

粒選りを舌に転がすマスクット

はらからの集ふ回向や柿日和

べい独楽のソフトゲームに変わる路地

ゆつくりと射し込む朝日今朝の冬

ラグビーの歓声煙る焼鳥屋

横浜 野村重子

溪流の音の幽かや崖紅葉

岩を抱く樹の根太きや溪紅葉

底深き谷にをちこち櫨紅葉

秋冷や宝登山へ入る白鳥居

武甲山なほも削られ秋の雨

秋の日を返す大屋根威風なる

耕 土 集

森清 堯 選



露草や雨の雫を珠とせり

浦安 東 正則

弟と永久の別れや金木屋

横 浜 宮地 静雄

白塗りの稚児の鼻筋豊の秋

へぼ将棋曾孫に勝てず秋の暮

雲上の城やはさ木を額として

言葉もて生くる人生初紅葉

納骨の遅るる祈り草の絮

一人なる暫しの留守居日向ぼこ

切通し落葉だまりの日の匂ひ

布団干す心のしこり干してをり

秋晴や干さる靴の大小小

横 浜 小池 桃代

リハビリの夫の靴拭く今朝の冬

横 浜 小原 紀子

秋霖や仕舞の見えぬ布解き

冬の日の九人の句会初冬忌

秋日和皇居広場に祈る幸

小春空杖の夫は父に似て

突然の泊り客とてとろろ汁

銀食器ひとり磨くや冬日向

銀杏や鼻をつまみて拾ふ子よ

一望の芙美子の海や小春風

余生にもときめき少し秋桜

横 浜 吉原ひろ子

白菊や僧とふたりの遠忌なる

印 西 大坂 正

身に入むや吾も暮色の中にとり

沼の上の気流あるらし鷹柱

また一つこぼすどんぐり小さき手

飛ひながら尖り鳴く鳥今朝の冬

伝へたき味に子芋の煮えにけり

やはらかに散る山茶花の日和かな

それとなく待つ返信や秋の風

植込みの隅の花石露晴れわたり